

子どもの成育と健康度に関する研究 IV

— 基本的生活習慣と社会性の関係 —

須永 進*・青木 知史**・堀田 典生***

A Study on Growth and Health of Children IV

Susumu SUNAGA, Satoshi AOKI and Norio HOTTA

要 旨

基本的生活習慣と社会性の関係では、A 群（基本的生活習慣が獲得されている子ども）がそうでない B 群の子どもより、社会性の発達の中で各項目ともに上回っていることが、今回のクロス集計で明らかになった。また、精神面における項目においても同様の傾向がみられるなど、子どもの成育と健康度という視点から、幼児期の子どもにとって基本的生活習慣の獲得が不可欠な要因であることが、改めて確認されたといえる。
キーワード：子どもの基本的生活習慣、社会性の発達

1. はじめに

本研究では、これまで子どもの成育と健康度に関する研究として、5, 6 歳の幼児を持つ保護者を対象に質問紙法による調査を行い、2014 年に子どもの社会性の発達について^{1) 2)}、また、2015 年には運動能力との関係について随時、その研究結果³⁾を公にしてきた。今回は、幼児の基本的生活習慣が獲得されている群と、十分でない群の 2 群に分け、社会性の発達とクロスすることで両者の関係を明らかにすることを目的としている。

2. 方法

本研究は、幼稚園及び保育所に通う 5, 6 歳児を持つ保護者を対象に質問紙⁴⁾による調査を行い、主に保護者の援助なしに、子ども自身で自立に必要とされる基本的な生活習慣の獲得状況を尋ね、その達成状況（割合）の結果を基礎データに考察することとした。

このことにより、子どもの成育過程による基本的生活習慣の獲得と社会性や運動機能などの発達と関連があるかどうかを確認し、今後の幼児教育、保育の内容

や方法を検討するための基礎資料となることを目的としている。

調査対象とした施設の選定方法は、倫理的配慮の上、この研究の目的や方法に同意され、協力に承諾いただいた幼稚園 5 園（北海道、埼玉県、大阪府、静岡県、三重県内の各 1 園ずつ）と、保育所 5 か所（北海道、東京都、静岡県、岐阜県、大阪府内の各 1 か所ずつ）の計 10 施設で、その保護者 493 名より回答を得た。調査期間は 2012 年 9 月から 10 月に実施している。

また、本研究は大阪成蹊短期大学の研究倫理の審査を受け、承認されている（2012 年）。

3. 結果と考察

今回の分析にあたって基本的生活習慣については、幼児の自立的行為として考えられる起床、就寝、歯磨き、手洗い、トイレなど、日常的に見られる行為が他者の手を借りずに自分でできるかどうかをひとつの基準に考え、それが獲得されている子どもを A 群、その反対に獲得されていない子どもを B 群とし、社会性の発達の指標と考えられる 17 項目との関係を比較・考察した。その結果は以下のとおりである。

* 三重大学

** 大阪成蹊大学

*** 中部大学

1) 自分のしたことを大人にみてもらいたがる

子ども自身でやり遂げたことを身近な大人に認めてもらいたいという思いを伝えるなど、積極的に他者とのかかわりやコミュニケーションをとろうとする行為について、基本的な生活習慣が身につけていないB群の子どもたちより、身につけているA群の子どもたちに多くいることが次の図1からわかる。

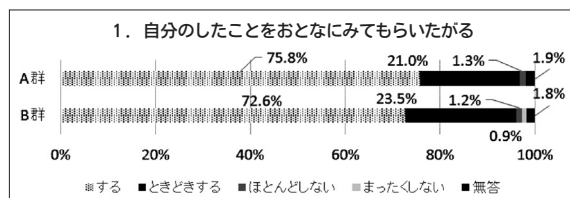


図1. 基本的な生活習慣と社会性 (他者との積極的なかかわり)

2) ほかに子どもに玩具を持ってきてあげる

一緒にいる他の子どもへの思いやりを示しているこの行為は、社会性の発達という点で見落とせない。今回の調査では、図2で示されたようにA群の子どもたちの方がB群の子どもたちに比べ、多くみられた。すなわち、相手を思いやる気持ちの発達に関して、基本的な生活習慣が身につけている子どもの方がその割合が高いという結果であった。

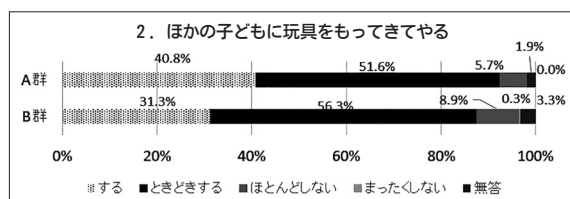


図2. 基本的な生活習慣と社会性 (思いやり)

3) 大人の手伝いを素直にうける

社会性のうち、協調性の発達も5, 6歳の幼児には期待される。それは、大人の働きかけを受けて共に目的に向けた行為を行うことで、集団生活や対人関係に不可欠な協調性が育まれるからである。「する」「ときどきする」を合わせたA群の子どもたちは、B群より1.3%とわずかながら多いことが下の図3から理解できよう。

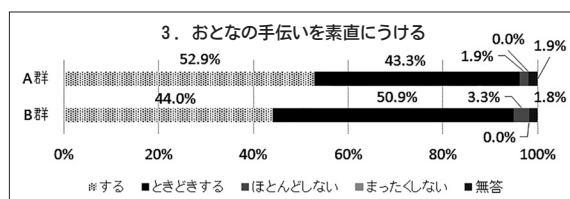


図3. 基本的な生活習慣と社会性 (素直さ)

4) 自分の番になるまで待つことができる

この課題も生活や仲間集団にとって求められる社会性

のひとつであることから、その獲得率は無視できない。図4にみられるように、ここでもA群、すなわち基本的な生活習慣が身につけている子どもにこの課題をクリアしている割合が、そうでないB群より多いことがわかる。

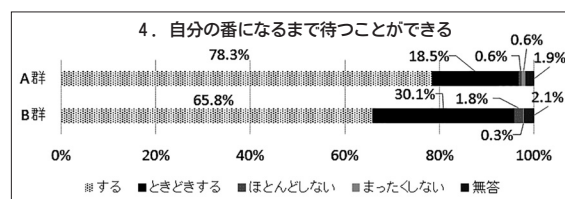


図4. 基本的な生活習慣と社会性 (ルールの順守)

5) よその子どもとの間に競争心がある

ここでいう競争心は、他の子どもの行為をみて、自分も負けたくないという思いであり、相手への必要以上の対抗心とは異なるものを指している。自分に足りない点や他の子と同じようにしたい、なりたいという気持ちで、子どもの成長・発達を促す上でも必要といえる。この点についても、A群がB群の子どもたちよりその割合において多い結果になっている。

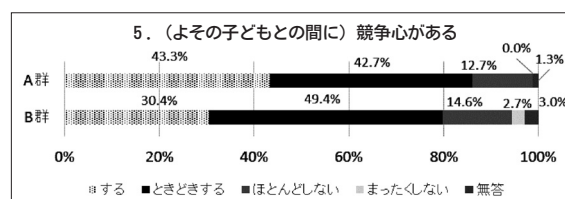


図5. 基本的な生活習慣と社会性 (競争心)

6) 悲しんでいる子どもをなぐさめる

5, 6歳児では、グループで遊んだり、行動することが多くなり、友達への関心が強くなる。その友達がいつもと異なる、例えば、悲しんでいる表情や態度が感じられると、様子を見たり、声をかけたりする行為が見られる。共感や同情といった友達への思いによるもので、社会性の育成にとって重要な行為といえる。図6によると、基本的な生活習慣が身につけていないB群では、この割合がA群より低い傾向がみられる。

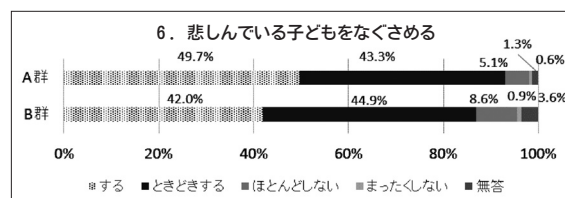


図6. 基本的な生活習慣と社会性 (思いやり)

7) 「わたし」、「ぼく」といったことばで自分を呼ぶ

年少児の子どもは多くは、自分を名前で呼ぶことが多いが、年長の5, 6歳児では、名前ではなく「わた

し、「ぼく」といった、一般的に自分を指すことばで自分を表現しようとする傾向がみられ、社会性という発達面を推し量るひとつの指標と考えられる。ここでも、基本的生活習慣の身についた A 群の子どもたちの割合がそうでない B 群より多い結果になっている。

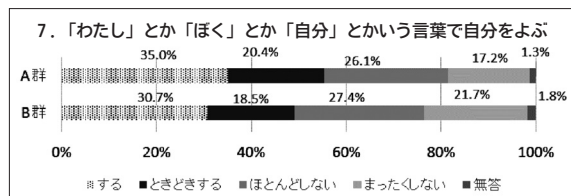


図7. 基本的生活習慣と社会性（自己の客観性）

8) ほかに子どもを援助したり、守ったりする

一緒に行動したり、相手の存在感を積極的に受け入れ、集団で行動する 5, 6 歳児では、仲間への思いも強く、思いやる心の成育がみられる。この友達への援助や支えといった行為は、他者との関係を維持する上で重要であり、その後の人間関係の形成に影響する部分といえる。今回の結果では、下の図 8 に示されたように、A 群の子どもたちが B 群より多く、この点でも、基本的生活習慣の獲得の重要性を知ることができよう。

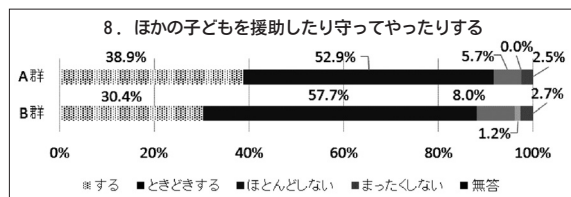


図8. 基本的生活習慣と社会性（思いやり）

9) よその子を誘って新しい遊びをはじめ

5, 6 歳児の多くは、遊びやその他の活動で友達や仲間というグループで行動する傾向がみられる。この「よその子を誘って新しい遊びをはじめ」行為は、社会性の発達にかかわることから、この結果をみると、図 9 のようになっている。すなわち、B 群の子どもたちに比べ、A 群の方がその割合が高く、社会性の発達という面で進んでいるといえそうである。

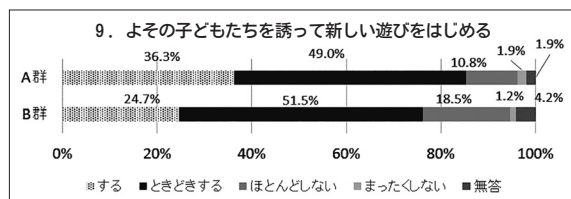


図9. 基本的生活習慣と社会性（協調性）

10) よその大人に進んで話しかける

この項目も子どもの社会性を示すもので、図 10 で

は A 群の子どもたちが B 群の子どもたちより、割合の上で多くなっている。要するに、基本的生活習慣が獲得されている子ども（A 群）の多くは、他者へのかかわりに積極的で、意欲的な行動がみられるという。その後の人間関係を作り上げていく上で、こうした社会性の発達は軽視できない。

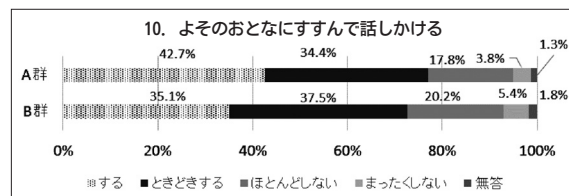


図10. 基本的生活習慣と社会性（積極的なかかわり）

11) ほかに子どもの誤りや間違いを指摘する

この年齢の子どもは、ルールや決まりを覚えて、それを守るだけでなく、相手に対してもそれを求める、社会性の成育の一端がみられる。この点については、次の図 11 の結果に A 群、B 群の比較が示されているが、ここでも基本的生活習慣ができていない A 群の子どもたちがそうでない B 群の子どもたちよりその割合が多くなっている。

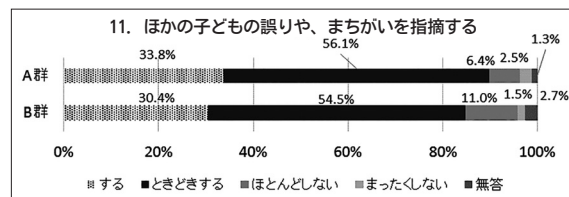


図11. 基本的生活習慣と社会性（他者への関心）

12) ほかに子に迷惑をかけたら謝る

行動を共にする時間の多い 5, 6 歳児は、トラブルや些細なイザコザの起こることが少なくない。また、何かのはずみで、相手に迷惑をかける行為もよくある。その際、気付いて謝ることで、大きなトラブルや衝突に発展しないで、これまでの関係を保つことができる。この年齢の子どもには難しい課題ではあるが、これから成育していく上で、身につける必要のある行為といえる。これについては B 群より、A 群の子どもの方が「謝る」という行為ができる割合が多くなっている。

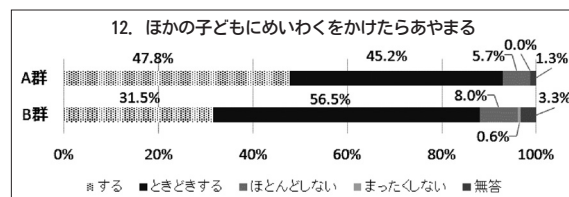


図12. 基本的生活習慣と社会性（道徳性）

13) 男の子だけで遊ぶ、女の子だけで遊ぶ

男の子の場合、男の子だけ遊んだり、女の子では女の子だけで遊ぶというのは、社会性との関係でみると、遊び集団の構成にあたって性別で判断する結果、同性という限定された友達と遊ぶことになる、すなわち、遊びを通して他者とのかかわりが広がっていくことが社会性を促すとすれば、問題といえるかもしれない。今回の結果では、こうした傾向はA群よりB群に多いことが表れている。

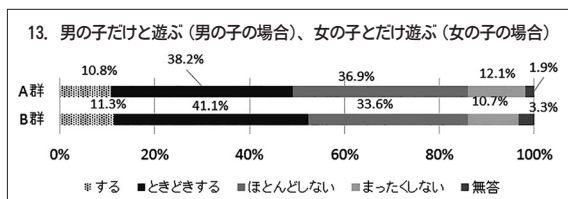


図13. 基本的な生活習慣と社会性（未熟性）

14) ほかに子どものことをほめる

相手の存在を認め、それを表現することは、子ども自身の成育の表れといえる。こうした認識が社会性をさらに高め、その子自身の人間関係を豊かにすることにつながるが多い。図14では、B群よりA群にそうした傾向がみられる。

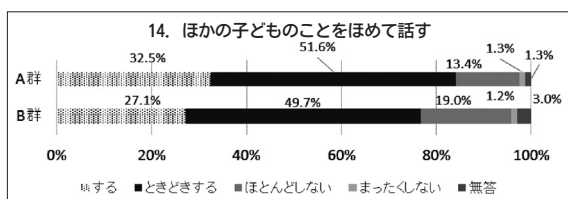


図14. 基本的な生活習慣と社会性（自他の認識）

15) まかされたことを責任もってする

年齢的に、この5、6歳児では親や園の先生にまかされたことをきちんとしようという気持ちが育まれている子どもが少なくない。まかされた課題に対して責任感をもって行動できる子どもは、A群に多く、B群はそれより少ないという結果になっている。

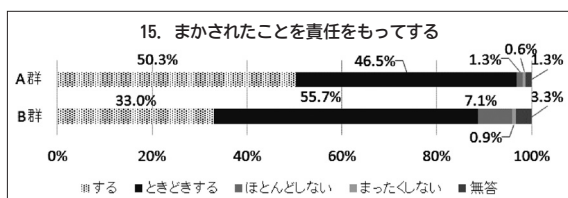


図15. 基本的な生活習慣と社会性（責任感）

16) 自分のことを自分の名前でいう

これは、先の7)に関連する内容であるが、ここの結果は、以下の図16に示されている。これは、精

神的年齢が低い子どもでは、自分を自分の名前で呼ぶことが多くみられるとすれば、A群より、B群にこうした傾向がみられる。

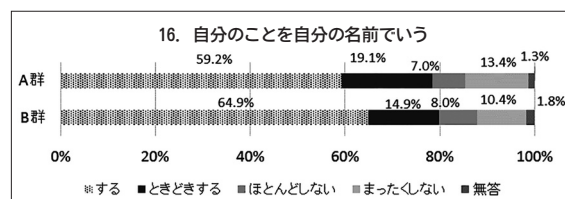


図16. 基本的な生活習慣と社会性（未熟性）

17) 自分の思い通りにならないということをきかない

遊びやその他の生活の場面では、自分の思いや考えを抑えて、相手の意に従わざるを得ないこともあるが、この社会性の発達には集団生活や対人関係を考える上で重要であることから、調査の結果をみると、基本的な生活習慣が獲得されているA群の子どもは、そうでないB群より少ないという結果になっている。すなわち、基本的な生活習慣が獲得されている子どもの多くは、自己の思いや要望を適切にコントロールできることがB群の子どもより多い傾向がみられる。

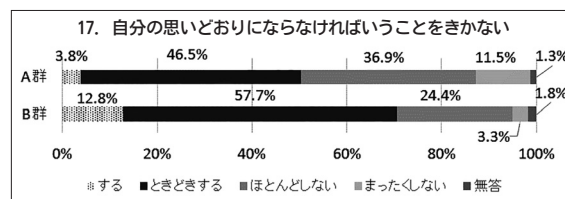


図17. 基本的な生活習慣と社会性（自己中心性）

この他、テレビ視聴との関係を見ると、以下の図18の結果となっている。

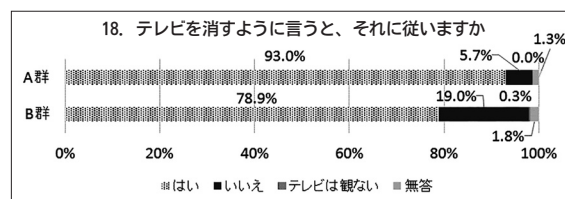


図18. 基本的な生活習慣と社会性（自律性）

このテレビ視聴について「消すように」言われ、それを受け入れる（あるいは受け入れようとする）意識は、精神面の成育のうち自律性の発達と関係があるとすると、ここでも基本的な生活習慣が身についているA群の子どもにその傾向の強いことがわかる。

以上のように、今回の結果を通して、次のことが指摘される。

まず、調査対象とした5、6歳の子どもの成育にとっ

て基本的生活習慣の獲得が社会性の発達と密接な関係にあることが改めて、明らかになった。なかでも、この時期の子どもの人間的成育にとって不可欠である、起床、食事、歯磨き、就寝といった基本的生活習慣の獲得や遊びや大人とかかわりに対する対応、さらにはそれに伴う社会的規範の意識や形成、行動など、社会性の成長に関係のあることが確認された。また、同時に生活習慣が十分でない子どもの中には、自己規制や友達への思いやりといった精神性や社会性の発達に問題が認められる子どもの存在が今回の調査の分析により、浮き彫りになっている。

こうした結果をふまえ、幼児の発達の危機的状況が叫ばれる中⁵⁾で、保育や幼児教育の課題として、日々の保育を通して、年齢や発達段階、子どもの興味や関心などを十分考慮しつつ、基本的生活習慣を身につけていけるよう、具体的な保育・教育内容や方法を見直すなど、これまでの取組みへの点検・評価をさらに進めていく必要がある。また、こうした取組みには、必然的に家庭との連携を推し進めていくことが求められる。少数化やひとり親の増加など、変容する今日の家庭や家族の、その多様化する価値観や子育て観を認めながら、子どもの人間的成育と健康の推進を図るために、改めて基本的生活習慣の重要性とそのための具体的な取組みがこれからの保育や幼児教育にとって喫緊の課題といえる。

最後に、今回の調査にご協力いただいた、幼稚園、保育園および保護者の皆さんに謝意を表します。

なお、本研究の研究結果については、日本保育学会第 69 回大会（2016.5.7）で研究発表を行った。内容に関しては、同学会発行の研究発表要旨集（CD-ROM）を参照。

注

- 1) 青木知史、須永 進、堀田典生「子どもの成育と健康度に関する研究Ⅰ—社会性と発達を中心に—」大阪成蹊短期大学「研究紀要」第 11 巻 通巻第 51 号 2014. 3
- 2) 堀田典生、須永 進、青木知史「子どもの成育と健康度に関する研究Ⅱ—幼児の身体活動性を規定する因子の幼稚園児と保育園児の違い—」中部大学 生命健康科学研究紀要
- 3) 須永 進、青木知史、堀田典生「子どもの成育と健康度に関する研究Ⅲ—基本的生活習慣の獲得—」三重大学教育学部研究紀要 第 67 巻（教育科学）
- 4) 今回の調査で使用した質問紙は、上記 1) に掲載（同論文 p 8~9 参照）
- 5) 子どもの発達上の危機については、須永 進「日本の現代社会と子どもたち」『子どもの福祉』八千代出版 2007. および須永 進「現代の子どもの諸相と保育」『改革期の保育と子どもの福祉』八千代出版 2010. に詳しい。この他、瀧井宏臣「こどものライフハザード」岩波書店 2004. 「父よ母よ園児が壊れる」『AERA』朝日新聞社 2005.

表1 幼児の基本的な生活習慣と社会性

			する	ときどきする	ほとんどしない	まったくしない	無答	計
1)	自分のしたことをおな にみてもらいたがる	A群	119	33	2	0	3	157
			75.8%	21.0%	1.3%	0.0%	1.9%	100.0%
		B群	244	79	4	3	6	336
			72.6%	23.5%	1.2%	0.9%	1.8%	100.0%
	合計		363	112	6	3	9	493
			73.6%	22.7%	1.2%	0.6%	1.8%	100.0%
2)	ほかの子どもに玩具を もってきてやる	A群	64	81	9	0	3	157
			40.8%	51.6%	5.7%	0.0%	1.9%	100.0%
		B群	105	189	30	1	11	336
			31.3%	56.3%	8.9%	0.3%	3.3%	100.0%
	合計		169	270	39	1	14	493
			34.3%	54.8%	7.9%	0.2%	2.8%	100.0%
3)	おどなの手伝いを素直 にうける	A群	83	68	3	0	3	157
			52.9%	43.3%	1.9%	0.0%	1.9%	100.0%
		B群	148	171	11	0	6	336
			44.0%	50.9%	3.3%	0.0%	1.8%	100.0%
	合計		231	239	14	0	9	493
			46.9%	48.5%	2.8%	0.0%	1.8%	100.0%
4)	自分の番になるまで待 つことができる	A群	123	29	1	1	3	157
			78.3%	18.5%	0.6%	0.6%	1.9%	100.0%
		B群	221	101	9	1	7	336
			65.8%	30.1%	1.8%	0.3%	2.1%	100.0%
	合計		344	130	7	2	10	493
			69.8%	26.4%	1.4%	0.4%	2.0%	100.0%
5)	(よその子どもとの間に) 競争心がある	A群	68	67	20	0	2	157
			43.3%	42.7%	12.7%	0.0%	1.3%	100.0%
		B群	102	168	49	9	10	336
			30.4%	49.4%	14.6%	2.7%	3.0%	100.0%
	合計		170	233	69	9	12	493
			34.5%	47.3%	14.0%	1.8%	2.4%	100.0%
6)	悲しんでいる子どもをな ぐさめる	A群	78	68	8	1	2	157
			49.7%	43.3%	5.1%	0.6%	1.3%	100.0%
		B群	141	151	29	3	12	336
			42.0%	44.9%	8.6%	0.9%	3.6%	100.0%
	合計		219	219	37	4	14	493
			44.4%	44.4%	7.5%	0.8%	2.8%	100.0%
7)	「わたし」とか「ぼく」とか 「自分」とかという言葉で 自分をよぶ	A群	55	32	41	27	2	157
			35.0%	20.4%	26.1%	17.2%	1.3%	100.0%
		B群	103	62	92	73	6	336
			30.7%	18.5%	27.4%	21.7%	1.8%	100.0%
	合計		158	94	133	100	8	493
			32.0%	19.1%	27.0%	20.3%	1.6%	100.0%
8)	ほかの子どもを援助した り守ってやったりする	A群	61	83	9	0	4	157
			38.9%	52.9%	5.7%	0.0%	2.5%	100.0%
		B群	102	194	27	4	9	336
			30.4%	57.7%	8.0%	1.2%	2.7%	100.0%
	合計		163	277	36	4	13	493
			33.1%	56.2%	7.3%	0.8%	2.6%	100.0%
9)	よその子どもたちを誘っ て新しい遊びをはじめ	A群	57	77	17	3	3	157
			36.3%	49.0%	10.8%	1.9%	1.9%	100.0%
		B群	83	173	62	4	14	336
			24.7%	51.5%	18.5%	1.2%	4.2%	100.0%
	合計		140	250	79	7	17	493
			28.4%	50.7%	16.0%	1.4%	3.4%	100.0%
10)	よそのおとなにすすんで 話しかける	A群	67	54	28	9	2	157
			42.7%	34.4%	17.8%	5.7%	1.3%	100.0%
		B群	118	126	68	18	6	336
			35.1%	37.5%	20.2%	5.4%	1.8%	100.0%
	合計		185	180	96	24	8	493
			37.5%	36.5%	19.5%	4.9%	1.6%	100.0%
11)	ほかの子どもを誤りや、 まちがいを指摘する	A群	53	88	10	4	2	157
			33.8%	56.1%	6.4%	2.5%	1.3%	100.0%
		B群	102	193	37	5	9	336
			30.4%	54.5%	11.0%	1.5%	2.7%	100.0%
	合計		155	271	47	9	11	493
			31.4%	55.0%	9.5%	1.8%	2.2%	100.0%
12)	ほかの子どもにめいわく をかけたらあやまる	A群	75	71	9	0	2	157
			47.8%	45.2%	5.7%	0.0%	1.3%	100.0%
		B群	108	190	27	2	11	336
			31.5%	56.5%	8.0%	0.6%	3.3%	100.0%
	合計		181	261	36	2	13	493
			36.7%	52.9%	7.3%	0.4%	2.6%	100.0%
13)	男の子だけと遊ぶ(男の 子の場合)、女の子だけ 遊ぶ(女の子の場合)	A群	17	60	58	19	3	157
			10.8%	38.2%	36.9%	12.1%	1.9%	100.0%
		B群	39	138	113	36	11	336
			11.3%	41.1%	33.6%	10.7%	3.3%	100.0%
	合計		55	198	171	55	14	493
			11.2%	40.2%	34.7%	11.2%	2.8%	100.0%

		はい	いいえ	テレビは観ない	無回答	合計	
18)	テレビを消すように言っ と、それに従いますか	A群	146	9	0	2	157
			93.0%	5.7%	0.0%	1.3%	100.0%
		B群	285	64	1	6	336
			78.9%	19.0%	0.3%	1.8%	100.0%
	合計		411	73	1	8	493
			83.4%	14.8%	0.2%	1.6%	100.0%